



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人生過程観と宗教
Author(s)	宇都宮, 輝夫
Description	
Citation	哲学, 38, 1-20
Issue Date	2002-07-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48027
Type	departmental bulletin paper
File Information	38_1-20.pdf



人生過程観と宗教

宇都宮輝夫

はじめに

永禄三年五月十九日早暁、死を覚悟の出陣の前に、信長は幸若の「敦盛」の一節をひとさし舞いつつ謡った。「人間五十年、下天のうちをくらぶれば、夢幻のごとくなり、ひとたび生をえて、滅せぬもののあるべきか」。『信長公記』が伝える世に名高い桶狭間の合戦のくだりである。これまで注目されることはなかったが、ここで幸若舞の果たしている機能は興味深い。最期を覚悟した信長にとっては、それは、己のそれまでの全生涯を理解し、自分に受容させるための一種の人生観となっている。これはアイデンティティ維持の機能と呼ぶことができる。他方それは、本来は美を追究した芸術であつたし、同時に芸能として、娯楽を供するものでもあつた。しかし引用した謡は、平経盛からの謝状を読んで菩提の心を起こした熊谷直実の言葉であり、仏教の真髄を表す。したがって幸若は、第一義的には芸術・芸能として美の追究でありつつ、同時に娯楽であり慰みともなる。しかし時には人が己の一生を観念するとき、人間とは何かという問いに得心をえさせ、アイデンティティを支える人生理解となつて現実を受容させもする。さらにそれは、由来から言えば、宗教でもあつた。機能の多様性という点から言えば、宗教自体にもこれと等しいところがある。

宗教は単一の定義が不可能なほど多様な実質を有しているが、機能もまた同様である。とはいえ、宗教の最も重要な機

能のひとつは、人生過程を人々に理解させること、それによって人間のアイデンティティを形成・維持することにあると思われる。本稿はこのことを、ルックマンの宗教論の吟味という形を取って論じたい。これが第一の課題である（第一節）。その際、抽象的といわれる彼の宗教論の中核をなす生活世界の構造論を取り上げ、一つの歴史的事例を通してその具体相を示してみたい。それは聖なるコスモス論を具体的に例示する試みであり、これが第二の課題となる（第二節）。さらに、聖なるコスモスが結晶化した一例として、一連の宗教図像を取り上げ、ルックマンの宗教論と連関づけて検討してみたい。付随的にはあるが、その機能が多様であつたことにも言及したい。これが第三の課題である（第三・四節）。

一 ルックマンの聖なるコスモス

アイデンティティの形成と維持という視点から宗教論を展開した典型的議論として、現象学的社会学のそれを挙げることができる。まず、ルックマンの宗教論を簡単に振り返っておく。（一）

事物・事態は、それ自体としては意味を欠いている。意味は個々の事物・事態に内在しているのではなく、それらの地平である全体的意味連関に照らして、解釈行為によつて付与される。たとえば、アクセル・ペダルは、自動車的全機構を前提にして初めてアクセル・ペダルになるのであり、自動車はそれが組み込まれている社会全体を背景にして初めて自動車であり得る。無限にありうる解釈可能性の中から、一定の意味を確認できるのは、人間が社会の解釈図式Ⅱ意味体系に照らして解釈しているからであり、人々の判断が一致するのは、解釈図式が社会的なものとして共有されているからである。

社会の意味体系を、ルックマンは世界観と呼ぶ。一つのシステムをなす世界観の中で、諸要素は同等の資格で並列的に存在しているわけではない。そこには一定の序列ないし階層を認めることができる。世界観の最下層には、具体的な事物や事柄を類型化する概念が存在している。例えば、木・石・空・犬・食べる・歩く・赤・手などである。その上層には、実用的な行為手順の知識などが存在している。例えば、本は机にすわって読む・切符は自動販売機で買う・杭には防腐剤を塗る、などである。この層はさらに上へと、すなわちかなり一般的な行為規則ないし倫理規範へと連続的に連なっている。例えば、「車線変更時には必ずウィンカーをあげる」などがそれである。このようにして世界観を下層から上層へと上昇するにつれて、特殊・具体性が次第に薄れ、一般性・抽象性が高まってゆく。このようにして進んだ最上層には、人間の全人生を包括し、一生を評定する観念ないしイメージが現れる。日常生活での個々の事柄は、この観念・イメージの中におかれて初めて有意義になる。これをルックマンは聖なるコスモスと呼ぶ。この層は、象徴的な表現形式を借りて、日常生活の世界とは別の現実領域を指し示すようになる。これが宗教的表象に他ならない。世界観全体の中から、聖なるコスモスをなす意味の層が象徴の力を借りて目に見える形で結晶化・析出してきたとき、それが宗教の特定の歴史的社会的形態なのである。

ルックマンの宗教論は、一方ではこうした生活世界の構造論から説かれ、他方ではこれと対応して、アイデンティティ論から説かれる。彼によれば、人間の存在は、過去から現在にいたり、未来へとつながる、倫理的に一貫した生き方に統合されている。少なくとも、自己の人生がそのような意味の一貫性に向けて絶えず解釈し直され、自分に納得できるように繰り返し繰り返し再編成される。これこそアイデンティティと呼ばれるものである。

以上のようなルックマンの宗教論は、一方では宗教に対する新しいアプローチを切り開いたものとして評価されつつも、他方では過度に図式的な議論として、また現実には適合するか否か十分検証できない抽象的議論として、批判的懐疑的な目

で見られてきた。第一の批判については、ここでは具体的反批判は差し控えておく。これに対して、主として実証的立場からしばしば唱えられる抽象性批判には、耳を傾けるべきところがある。というのは、生活世界の構造論は、論理自体には異論を差し挟むのが困難であるとはいえ、実証研究になじまない、と人々に感じられてきたからである。広く人々に感じ取られてきたこの胡散臭さを払拭するためには、やはりもつと歴史的具体的な事例研究の成果提示が望まれるのではないだろうか。その一つの試みとして、時間規律という倫理的生活態度の成立を取り上げ、生活世界の構造をある程度可視化してみたい。

二 遅刻の誕生

橋本邦彦ほか計一二名の研究者が、明治になるまで日本人が持ち合わせなかった時間感覚、つまり時間厳守とか時間を惜しむ勤勉の精神がどのように形成されてきたかを明らかにしている。⁽²⁾ここで示された時間意識形成の個別的側面をまとめ、生活世界の構造論として組み替えると、以下のような議論に再編できる。ここで見て取るべきは、世界の中の個々の事物・事態は孤立して存在するのではなく、すべてが相互連関して一つの全体を構成していること、しかもその内部の諸要素はそれぞれのいわば身分に応じていくつかの層に区別することができること、である。

時間規律の物理的実現可能性 時間の大切さを教え、時間規律を植え付けるといつても、時間を人為的に区切った区切りそのものが季節によって伸縮して変化するなら、正確な時間計測のしようがない。そこでまず、当時の不定時法を廃して、一日二四時間の定時法を導入しなければならなかった。さらに、時間が地方ごとに異なるのでは、時間規律などは

実行不可能であるから、標準時の制定が不可欠となる。しかも時間の斉一化に先立って、そもそもグレゴリオ暦による改暦がなされざるをえない。

しかしさらにその前提がある。計測法が存在しても、時刻を知る物理的手段がなければ話にならない。時間を知るための物品は時計であるが、それが広く普及する以前には、時間を知らせる手段として社寺や庁舎などの施設で鳴らされる鐘や太鼓、工場などのサイレンといった設備が整備されねばならなかった。

しかし、たとえ時刻を知る手段が存在したとしても、時刻通りに人が作業しうる種々の制度や道具がなければならぬ。鉄道の場合で言えば、切符販売や改札などの駅務、ダイヤ作成、運転、保安等の全システムの間に統一的連携をはかる制度を作らねばならない。そして鉄道が定時運行をしたとしても、それを人々に周知させねばならない。かくして時刻表の普及が急務となる。また、定時運行の技術的可能性は、牽引力の強い大型機関車や電気機関車の国産化、線路勾配の改良、自動連結器の導入、エアブレーキの採用などがあつて初めて可能となった。

物的・制度的可能性が整備されても、時間厳守の行動パターンは生じない。人がそれに慣れなければならない。半時一時間ほどを目途に生活していた人々が、鉄道を利用する際には一〇分以下の時間厳守を求められたからである。そして慣れるということは新しいパターンが定着することであるが、そのためには、人間が新しい生活の価値を認め、欲求が変化するのでなければならぬ。さもないと行動の新パターンは定着しない。長距離汽車旅行における急行列車の価値が認識されるようになるというのは、欲求変化の一例である。工場の始業時には、時間にルーズな旧習を考慮して一・二時間前に労働者は集合させられたが、全員が時間規律を身につけると、無駄な待機を迫られることがない。こうしたことの無限の積み重ねが、欲求を徐々に変化させるのである。

教育と啓蒙

時間規律に関わる物理的・技術的・制度的な面での可能性が開かれても、人々がそれらを事実認識とし

て理解しているのでなければ、それらは意味をなさない。新しいモノ、制度、事実などに対応する語彙・表現が発生し、人は初めてそれらの観念を形成するわけである。「分」や「秒」の観念も、こうして習得された。さらにそうした事実認識だけではなく、時間規律の規範をも内面化させねばならない。

その種の教育は、当然学校から始まる。まず、小学校の教科書で時間規律が教えられ、小学唱歌にもそれは現れる。子供向けの雑誌や漫画にも登場する。さらに文部省による「小学生徒心得（全一七条）」が制定され、そこでも時間規律が説かれる。生徒に教えても、教師がそれに反した生活をしていたのでは効果がない。そこで教師には「小学教師心得（全一四力条）」が制定される。さらに、小学校では小使いが鐘で時を知らせるが、そのために小使いの勤務規定が必要になる。また文部省は外郭団体「生活改善同盟会」を設立し、種々の時間励行運動を展開した。宣伝ビラを配布する、さまざまな施設に一二時に時を知らせてほしい旨を依頼する、「時の講話」と題する講演を行う、時間規律を訴える標語・詩・格言・数え歌・いろは歌・替え歌などを広く募集する運動を繰り広げる、「時の記念日」を制定する、等の運動がそれぞれある。成人男子に対しては、フレデリック・テイラーの「科学的管理法」（『作業効率化のバイブル』）が新聞に連載され、その解説書が一五〇万部も売れた。同様に、サミュエル・スマイルズ著、中村正直訳『西国立志編』が明治三十四年に刊行され、その販売部数は一〇〇万にも達し、教科書にもなった。雑誌『マネジメント』が創刊され、時間の無駄を省く精神を説いた。婦人雑誌にもこの傾向は窺え、『家庭之友』において羽仁もと子が家事の効率の遂行方法を説き、幅広い読者層を獲得した。要するに、老若男女を問わず、社会成員全体への働きかけがあったのである。

社会的制裁 ところで、社会規範には必ず社会的制裁が付随する。あらゆる職場で、遅刻に厳罰が加えられた。例えば鉄道局は、一方ではネガティブな制裁として「営業線路従業員服務規程」（『罰則規定』）を作成し、他方、長期勤続と熟練化を狙ってポジティブな制裁として恩給と養老金の制度を導入した。社会で広く遅刻・欠勤の調査と対策案の策定が試

みられたが、これも社会的サンクシヨンの導入である。

時間規律の必要

以上の議論は、時間規律を身につけさせるためのさまざまな手段・方法を述べたわけであるが、ではその必要性はどこにあったのであろうか。具体的な場面での事例をあげよう。例えば新たに設立した近代工場では、多数の機械を同一の原動機で動かしたので、一斉作業が必要であつた。工場に高価な大型機械が導入されれば、機械の始動時間に合わせて、作業者も労働する必要があつたのである。この必要性の背後にあつたのは、効率的に製造された製品が市場を席卷するという市場の経済原理である。また、鉄道の普及は時間觀念定着の原因となつた。鉄道が定時運行されれば、時間にルーズな者は乗り損なう。長距離列車の運行が、全国標準時の設定を促した。鉄道相互の連絡輸送が開始されれば、厳格な定時運転が不可欠となる。運行頻度の上昇も、正確さを要求する。これに付随して、私設鉄道条例なども制定されている。さらに学校に目を転ずると、個別指導の寺子屋方式から同じ内容を同時に学ぶ一斉教育へと教育方法が変化したことが、時間規律の徹底を必然化したようである。最後に、近代軍隊の創設が時間規律の必要性を増大させたが、これは説明を要しないであらう。

全体的社会背景

ところで、時間規律がいったん確立してしまえば、欲求構造が変化して、新しい生活の形が定着するとしても、そもそもなぜ慣れ親しんだ旧態を捨ててまで新しい生活へと移行しなければならなかつたのであろうか。鉄道を例に取ろう。人とモノを速く運ぶ必要があつて初めて、鉄道が普及する。その背後にある事情は、産業発展が輸送市場を拡大したことである。さらにその背後には、産業化を迫られる周知の歴史状況があつた。そしてこの背後には究極的に、自分たちが形成しつつある社会的世界に関するイメージ、そこで生きる人間の生活に関するイメージ、そうした生活を送る人間の一生についてのイメージがひかえている。

このように、世界はモノと、諸層に区分できる表象とから成る。そして世界内のすべての構成要素は、他の全構成要素

と直接間接につながっている。それゆえ個々の要素は、世界全体の中の位置によつてその意味が決まる。太鼓は、ここでは時計が大量に普及する以前の代用品であるが、別の文脈では祭具とか遊具といった別のモノになる。時刻表はわれわれにとつては自明の物品であるが、客観的には微細なインクの模様のある紙の束である。いな、インクとか模様とか紙とかも一定の文脈を前提とする意味なのであるから、客観的には何ものでもない。世界や人生を表象するイメージも、当該の文脈を離れば、ただの妄想ともなりうる。このように世界は、比喩的に言つて、下から見れば無数のモノによつて支えられており、上から見れば人間観・世界観にその全体を包まれている。

世界の全体がこのように緊密なシステムをなしているのであるから、世界や人生の象徴的表現はもとより、個々の倫理・規範意識の変更や改革は、当然徐々にしか進まない。したがつて、さきの時間規律に話を戻せば、一九二六年の段階でも、軍隊・学校・鉄道その他ある種の工場を除いては、時間規律に關しては旧態のままであつた。しかも学校でさえも、学校教育の必要が真に認識される以前は、授業時間などいつでも無視された。例えば、東京で漁業を営む地域では、ひとたび大漁の知らせが入り、人手が必要になるやいなや、生徒は授業を打ち捨て、机を倒して教室を飛び出ていった。制止する教師は生徒から痛罵の言葉を浴びせられ、粗暴な仕打ちを受けさへした。社会全体で生活の形が変わるまでには、社会の構成要素の一こま一こまが徐々に変わらざるをえず、そのため実に長い時が必要なのである。一言で言えば、生活世界の全体が動いて初めて規範意識が確立するのであり、生活世界の全体が動かないかぎり、当初の規範意識は失われることがないし、別の規範意識を植え付けることもできないのである。

時間規律というたつた一つの規範が受容されるようになるために、どれほどの変化が連鎖的に必要となるかが、さきの議論によつてその一端なりとも示しえたと思われる。そして時間規律という規範は、これまた単一で存在できるわけではなく、その他の無数の規範と連動している。そしてその一つ一つの規範が、生活世界に無数の根を張っているのである。

世界の全体を受け容れていて初めて、ある規範を受け容れることができる。少し言い方を換えれば、一つの規範を受け容れることができるためには、世界の全体を受け容れている必要があるわけである。宗教も世界の一つの象徴表現として、いわば水面上に現れている冰山の一角ではない。

三 人生理解Ⅱアイデンティティの基盤

さて、再度宗教論に話を戻す。以上のように分節化した世界の最上層には、先に述べたように、人間の全人生を包括し、一生を評定する観念ないしイメージが位置するのであり、ルックマンによれば、その象徴的析出形態が宗教である。ところで、「人間の全人生を包括し、一生を評定する観念ないしイメージ」とは、生活上の個別事象を意味づける全体的人生過程像である。生活上の個別事象はそれ自体で意味を有するのではなく、この全体像を意味の参照枠としている。この点を簡単に例示しておく。

原始的な狩猟社会を想定しよう。そこでは、次のような知識・技術・性格がおそらく高い評価と称賛の対象となるであろう。すなわち、製鉄、正確に飛ぶ矢と強靱な弓の製作、的を逸さぬ弓矢の腕前、巧みな乗馬術、移動生活に適した住居の建築、足跡から獲物の種類と数を的確に予測すること、危険な動物との対決にひるまぬ勇氣、獲物の公平な分配に対する知恵と配慮、次世代への適切な技術的・道徳的教育などである。これに対して、高度な科学技術を産業基盤としている工業社会では、そこでの生活の形に適合した別個の事柄が価値となる。これら二つの社会では、意味づけは正反対といつてよいほど異なるであろう。第一の社会に生きる若き狩人にとって、クレジットカードは見慣れぬただの板切れにすぎず、

現代文化の多くが不道徳ないし不健全に見えよう。逆に、第二の社会に生きるエリートにとっては、地上に落ちた糞を手にとり臭いをかいで動物種を推測することは不衛生であり、生皮を剥いたり生き血を飲むことは野蛮以外ではあり得ず、弓矢はつまらぬ玩具でしかない。このように、一方の社会に生きる人間にとって重要なもの、価値あるものは、他方の社会で生きる人間にはまるで意味をなさない。いかなる事物と事柄も、世界全体の中で、そしてトータルな人生との関係で初めて有意味になるのである。

トータルな人生過程との関連で物事の意味を汲み取るということは、別言するならば、人間は過去と未来を絶えず現在に浸透させながら今ここにいる自分を意味づけているということである。こうした時間意識のありようは、過去把持と未来予持という概念で説明するとわかりやすい。音楽鑑賞を例にとろう。あるメロディが音要素 a—z からなっているとき、現在実際に音波として耳に届いているのは一音、たとえば d ではなく、その前の c は最早なく、その後の e はいまだない。しかし音楽鑑賞の経験としては、c は把持されており、e は予持されている。この把持—原印象—予持を次々にずらしていくと、一本の時間直線が形成され、その中でのみ各音は意味を持つ。これが音楽の理解と鑑賞である。現実の生活経験をこれとパラレルに置くことができる。現在の経験は孤立したものととして刹那的に知覚されるのではなく、過去の想起と未来の予期という時間直線のなかで理解される。具体的に言えば、現在の経験は、誕生から死に至るまでの時間直線のなかで意味づけられるのである。もちろんそれは、ゼロ点からの個人の主體的な創造行為としてなされるのではなく、社会的に既存の「一生の過ごし方」観—人生観の内在化プロセスとしてなされる。(3)

この人生観は、実は誕生以前から死後までをも含んでいる。誕生とそれ以前、死とそれ以後を原印象として持つことができないというのは、自明である。だからといって「人間は死んだらどうなるか、生まれる前はどうか、は誰にもわからない」のではなく、むしろ誰でもがそれを知っている。人は、他人の誕生前後と社会によるその受けとめ方を知つ

て、その知が自分へと投影される。同様に、人は他人の死とその後、および社会によるその受けとめ方を知って、その知が自分へと投影される。社会はこの意味での人生の全体像を具えている。

とはいえ、それは必ずしも明示的な形で存在するわけではない。暗黙知から明晰な言語化に至るまでの人生像を、以下で例示しておく。まず挙げるべきは、日常的相互作用そのものである。たとえば、人は「女の子らしい」と言って褒められ、「男のくせに」と言ってけなされたり叱られたりする。「もう赤ちゃんじゃないんだ」「年甲斐もない」「さすが年の功だ」といった一言の背後には、人生像に沿った役割期待があり、逸脱は直ちに矯正の対象となる。言葉だけではなく、玩具や衣類などの物品、遊び・興味・趣味・言葉遣いなどの些細なことも、ふさわしい行動様式・態度・心性を、つまり望ましい人格特性を指し示す。学校などの制度も、社会の価値観を再生産する装置である。このように、人間は自己のアイデンティティをいわば真空状態のなかで確立するのではなく、他者との相互作用のなかで確認し、これの無限の積み重ねがアイデンティティの確立につながる。日常生活の中に暗黙裡に含まれる人生像の中から、断片的に結晶化したものが諺・格言・金言の類である。それが人生の全体に及んだものが、人生段階についての定型的言説である。人生をいくつかの段階に分けてそれぞれの特徴を短く列挙する定型表現は、時代と地域を問わず知られている。⁽¹⁾言語化がさらに進めば偉人伝や代表的人物像となる。それは象徴であって、これとの比較対照を通じて人は自己の人生を組織し、意味づけ、統一的イメージへとまとめ上げることができる。

こうした言語的人生像と並んで、非言語的人生像も重要な意味を持っている。最も典型的かつ普遍的な例は、通過儀礼である。それは単に人間を社会成員へと仕立て上げる教育制度ではなく、一生の範例を提示することによって「人生とは何か」を上演し確認させる、人生像の象徴的表現である。このほかにも、人生の全過程をいくつかの段階に分けて描いた図像などもある（後述）。

このように、一生を象徴的に意味づける社会的装置は単一ではない。人間は、客観的に存在する複数の装置を用いて、自分の一生を意味づけようと主体的に努める。それによって人間は、自分の来し方を利他的あるいは支離滅裂なものとしてではなく、まとまりと連続性のある物語として理解しようとする。どのような紆余曲折を経ようとも、人生全体が一貫した意味を付与される。これこそ人間のアイデンティティ形成である。

四 人生段階図

さて、宗教もそうした装置の一つであり、そこには通例、人生観と世界観が含まれる。同時に宗教は、それを多くの図像を通して表現してきた。宗教のさまざまな図像のなかでも、最近特に注目されるのが、人生段階を描いたものである。
(5)

現存するなかで、西洋における最古のものとしてアリエスが、パルムの洗礼堂にある一二世紀の装飾を挙げている。また、カンタベリー大聖堂にある一三世紀のステンドグラスの中に、人間の一生を六つの段階に区分して描いた図像がある。しかし一八世紀までほとんど変化しない人生段階図像の基本形が定着するのは、一四世紀のことである。およそ共通する形式は、アーチ状の階段に、出生から死亡までの各年齢段階の人物を配し、アーチの中に宗教的モチーフが描かれる、というものである。たとえば、図1は男の人生段階を描いているが、これによれば、すべての段階は死の可能性を秘めており、死神の放つ矢はどの年代の者に当たるかも知れない。アーチの中には救済を司る教会が、あるいは天地の裁き主、イエス・キリストなどが描かれる。こうした人生段階図は、一四世紀以降全ヨーロッパに広く普及していった。それらは、

一面において、人生は区切られた幾つかの段階を経て流れ、避けられない死へと向かうものであり、それゆえ人生の終わりを考えよ、という警告であつた。他方でそれらの目的は徳育・教化にあり、敬虔で有徳な人生の歩みを教えた。その意味で、それらは理想的な人生の伝達であつた。しかしそれらは何よりもまず、人間の生涯の過程を理解し、人生全体についての基本的な知を伝えようとしたのである。

これと酷似した「熊野観心十界曼荼羅」が日本の各地に伝えられている。図2はその典型的な一つである。上部の弧状の坂道には、右下から登つて中央頂上にいたり、そこから左下へ下るといふ順序で人間の人生段階が描かれ、それに対応して四季を表現する樹木と花が背景に置かれる。弧状の坂道の内側、最上部には衆生を済度する阿弥陀が描かれており、その下には丸で囲まれた「心」の文字が書かれている。その下には孟蘭盆の施餓鬼が、さらにその下には賽の河原、そのまた下には地獄道が描かれている。この順序は救済レベルの順序を示す。中央と下部には、人生を終えた人が行くべき極楽と地獄のさまが詳細に表現されている。この図像は全体として、仏教の人間観と輪廻観を表しており、善を勧めて悪を戒め、阿弥陀仏への信心を説いたのである。

ここで問うべきは、この宗教図像がいかなる機能を果たしていたのかということである。「住吉神社祭祀図屏風」(図3)がそれを示唆している。この図は、熊野比丘尼が「熊野観心十界曼荼羅」を絵解きしていたことを表す。彼女たちは、元来熊野流の祈祷やお祓いをする旅の巫女たちで、やがて熊野比丘尼と呼ばれて、説教を語り、勧進もし、また絵解きもするようになった。彼女たちは、多能な宗教者であつた。というのは、彼女たちは、祈祷やお祓いによつて心を和らげ静めてくれる心理療法士であり、人生の心掛けⅡ観心を説く宗教者であり、面白おかしく地獄絵を絵解きする芸能者でもあつたからである。地獄極楽図であるにもかかわらず、聞き手たちの表情は一樣にくつろいでおり、楽しげでもある。最前列には、幼児が大人に抱えられ、紙芝居を見るがごとく絵に見入っている。聞き手は、絵画中の人物に自己を投影し重ね合



図1 「男の年齢段階図」16世紀アウクスブルクの木版画



図3 「住吉神社祭礼図」



図2 「熊野観心十界曼荼羅」



図5 「観心十方界図」

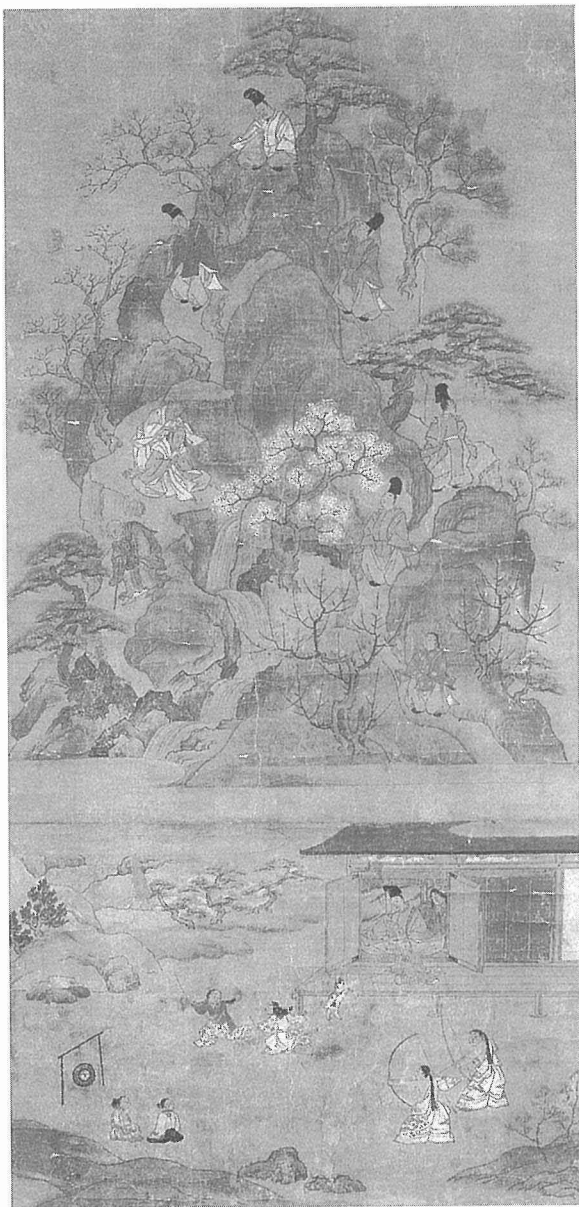


図4 「老の坂図」

わけて象徴的に人間の一生を体験した。これは社会的人生観の内在化であり、同時に宗教的教化である。他方、絵解きは特異な文学・芸能でもある。人生段階の諸処に「老いの坂登り登りて跡見れば、あとのとほさや先のちかさや」とか「極楽は日ごと近くなりにつけり、あはれうれしき年の暮かな」などといった付箋が残されているものがあり、比丘尼はそれを声高らかに詠唱して聴衆の感動を誘ったものと思われる。パーバラ・ルーシユは、感情に訴え享受者を取りこにすることを狙った新しい中世文学として、平曲・説教節・古浄瑠璃・歌曲と並んで、幸若舞・曲と絵解きとを挙げている。(6)彼女によれば、それらの根本目的は、聞き手を語り物の中に引き込むことであり、なかならず郷愁・悲しみ・誇り・喜び・驚き・感謝、そして笑いや改宗といった情緒的反応を呼び起こすことにあった。実際の大衆宗教性を理解するためには、こうした実際の効用と宗教教育と娯楽との絶妙の組み合わせを見なければならぬ。

最後に、この図像を手がかりにして、ルックマンの言う世界観と宗教との関係を検討してみたい。

諺・格言などが社会生活の中に沈殿してきた実用的・規範的知識を表現しているように、西洋の年齢段階図や日本の老いの坂図のような図像にも、長い間人々の間で共有されてきた伝統的な生活の知恵が凝縮されており、誰でも一目でその意味が分かる。生活の形が安定していて、生活の知恵が生きている限り、それが凝縮された図像もまた日常の中で生き続ける。つまり、宗教は、社会生活の中で現実に生きている知識を表現する限りにおいて社会の全面で命を有するのであって、そうでない場合には社会の片隅でかろうじて命をつなぐか、単なる歴史的化石となるかのいずれかである。ルックマン的に言えば、宗教は世界観内部の聖なるコスモスの析出物なのであり、そのようなものとしてある限り、生きた社会的大量現象であり続ける。

「熊野観心十界曼荼羅」の生成過程は、以上のような宗教と世界観との相即を示す。ここでの文脈で言えば、この図像がいかに世俗の人生段階観と同一線上、ないしその延長線上にあったかを示す。

まず、図4は、わが国の人生段階図の最も古いものに属する。描かれている人物からして、貴族の人生段階を表し、それにとつて有意義なものとして弓矢の練習が下部に描かれている。明らかにこれは、貴族の子弟の人生教育を目的としている。この図と熊野観心十界図とを繋ぐものは、網野や黒田らによれば、「観心十方界図」(図5)である。この図では、仏を最上位に、地獄を最下部にして、「心」の文字の周りに菩薩・人道・修羅・畜生・餓鬼等の十界が配置される。さて熊野観心十界図の上部は人生段階図であるが、下部は仏教の来世観である。上部と下部をつなぐ中間に「心」の文字が置かれ、そこから赤い線が放射状に伸びて周囲を分割している。ここから推測するなら、古くからあつた人生段階図に観心の仏教図が結びつき、熊野観心十界図に至つたと思われる。

長年のあいだ描き続けられ、絵解きで語り継がれてきたからには、それらの図像には人々が共有していた観念が凝縮されていたはずである。宗教的専門集団による特殊性を付与されていようと、社会的に共有されていた観念(Ⅱ人生段階の観念Ⅱ人の一生についての観念Ⅱ人生全体を視野においた最も包括的な観念を表現していたからこそ、人々の心の中で違和感なく生き続け、広範に受容されていたのである。ここでは、社会的人生観と宗教的人生観とが融合・相即しており、世界観のうちの聖なるコスモスが結晶化したと言えるよう。

むすび

ルックマンが強調する点の一つは、宗教の人間観は、実生活の中で人々によって現実に生きられている、この社会的な人間観・人生観を象徴的に表現したものであるという点にある。このときには、後者は明確な表現を得ることによって再確認され、再確認されることによって今一度はつきりと精神に刻まれ、強化される。ここでは宗教は人々の実生活の中で生きている、と言えよう。それに対して、宗教的生死観と社会の人間観とが乖離しているときには、宗教はもはや制度としての形骸を残すだけで、ただの空しい言葉となり、その社会的生命を終えることになる。

一種の比喩を用いれば、基本的には、法は道徳の結晶化したものでなければならぬ。さもないと人は日常の一挙手一投足に至るまで、それが適法か違法かを絶えず法典に照らして確認しなければならなくなる。あるいは法は現実生活に合わないものとして無視され、有名無実となる。これと同様に、宗教は日常の生活規範の象徴的析出である。さもないれば、宗教的観念は早晩、実生活に合わないものとして顧みられなくなる。しかしこれは、聖なるコスモスの析出として宗教を見た場合の理論的モデルである。歴史的文化的具体性・特殊性を考慮に入れるときには、基本モデルは無限に複雑な諸相に分かれる。本稿はそこまで踏み込むことはできず、ただルックマンの基本理論を独特な角度から検討したにとどまる。

注

(1) Thomas Luckmann, *The Invisible Religion*, Macmillan, 1974(1967). 赤池憲昭ほか訳『見えない宗教』ヨルダン社、一九七六年。ここでは、これ以外の著作をも視野に置いて要約している。

(2) 橋本毅彦、栗山茂久編『遅刻の誕生』三元社、二〇〇一年。

(3) ルックマンの言う人生イメージは、P・バーガーの言葉で言えば「一生の過」し方」観であり、どちらもA・シュッツの人生過程ないし人生計画(*Lebenslauf, Lebensplan*)の概念に由来する。Alfred Schütz, *Strukturen der Lebenswelt*, Band 1, Suhrkamp, 1979.

(4) ソロンやシェイクスピア「お気に召すまま」、『論語』為政篇などの表現は周知のところであるが、アリエスが多く例を紹介している。Philippe Ariès, *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien Régime*, Seuil, 1980(1960). 杉山光信ほか訳『子供の誕生』みすず書房、一九八五年。第一部第一章「人生の諸時期」を参照。

(5) 以下の記述に関しては、次のものに依拠した。Peter Joerissen et al, *Die Lebensstiege — Bilder der menschlichen Lebensalter*, Rheinland-Verlag, 1984. *Arbeits, op.cit.* 網野善彦ほか『人生の階段』福音館書店、一九九九年。森岡清美「日本人のライフコース観」(『時間』服部セイコー、一九八六年所収)。萩原龍夫「熊野観心十界曼荼羅」(平凡社『月刊百科』二一八号、一九八〇年所収)。黒田日出男「熊野観心十界曼荼羅の宇宙」(宮田登編『大系・仏教と日本人・性と身分』春秋社、一九八九年所収)。林雅彦『日本の絵解き』三弥井書店、一九九四年。バーバラ・ルーシュ「中世の遊行芸能者と国民文学の形成」(豊田武、ジョン・ホール編『室町時代—その社会と文化』吉川弘文館、一九七六年所収)。

(6) ルーシュ、前掲論文、三三〇頁ほか。宗教を機能の側面から捉えたデュルケムは、宗教を社会意識の表出と見なし、社会意識の再確認を通じての社会統合に宗教の機能を見た。しかし、彼はそこに宗教の本来的な機能を見たのであって、唯一の機能を見たのではない。彼の宗教論は一般には単純化されて理解されており、実際には彼はトーテム儀礼の他の機能も記述している。たとえば、(統合機能と同一線上にある機能であるが)氏族の神話的な歴史を記念的に上演する祭儀では、過去から現在に至る集団の神話的来歴が想起されることによって集団のアイデンティティが確認され、さらにその一員としての個人のアイデンティティも確認される。しかしこの上演の中には「笑いを促してうち興するため」とか「陽気さと上機嫌を保有するため」などといった「娯乐的・美学的な要素」も存在し、デュルケムはそれを宗教の重要な要素としてあげている。Emile Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, Presses Universitaires de France, 1979 (1912), pp.537-548. 古野清人訳『宗教生活の原初形態・下』岩波書店、一九七六年、二五三—二六七頁。